

三島ヶ嶽経塚小考

—富士山本宮浅間大社所蔵写真資料から—

勝 又 直 人

要旨 三島ヶ嶽経塚は昭和5年（1930）に富士山頂で発見された。出土遺物として経巻が納入された経筒や経軸・水瓶・土器等、また埋納施設として木樽が発見されている。その規模や文献等から久安5年（1149）の末代による一切経埋納の遺物や、末代以降の埋経と考えられている。平成20年度に実施された富士山世界文化遺産登録推進事業にかかり、富士宮市教育委員会が富士山本宮浅間大社において昭和5～6年の三島ヶ嶽経塚に関する報告で使用された写真の一部や未発表写真を確認した。名称不詳経典の写真について観察した結果、『大慈恩寺三藏法師傳』・『大方等大集經』の一部であると推定された。また既に確認されていた『佛本行集經』・『南海歸寄内法傳』の存在も勘案すれば、当該経典群は末代の埋納した一切経である可能性を補強する。今後、出土遺物や写真の所在確認・検討により三島ヶ嶽経塚の再評価がなされるものと期待される。

キーワード：三島ヶ嶽経塚 富士山、水瓶、経軸、木樽、経塚、末代、一切経、富士山本宮浅間大社、大慈恩寺三藏法師傳、大方等大集經、佛本行集經、南海歸寄内法傳

1 はじめに

三島ヶ嶽経塚は富士山山頂でも噴火口（大内院）の周囲に位置する峰のうちのひとつである三島ヶ嶽の麓に位置する。所在地としては静岡県富士宮市粟倉にあたるが、この富士山火口付近は静岡県・山梨県との県境が未だに確定していない。富士山は古来より崇敬の対象であり、富士山を御神体とする浅間神社等が各地に点在する。山頂には明治初期の廃仏毀釈まで、多くの仏堂・仏像が存在していたようであるが今は見る影も無く、破壊された仏像等が三島ヶ嶽付近に集積している。現在富士山八合目より頂上までは富士山本宮浅間大社の所有となっており、頂上すなわち富士宮口登山道、富士吉田口登山道の終点には浅間大社の奥宮が存在する。江戸期まで富士宮口登山道側の奥宮は、隆盛を極めた村山興法寺（村山修驗）の支配する大日堂が前身である一方、富士吉田口側の奥宮（久須志社）は浅間社の支配下にあり薬師堂であった。また江戸期には富士講が隆盛を極め、富士山という単体の存在に対して、様々なベクトルの信仰が集積していたのである。

この富士山にかかる考古学的調査の嚆矢として、昭和5年（1930）に三島ヶ嶽経塚の発見であり、件の遺物分析にかかる佐野武勇氏（佐野1930）や足立鍼太郎氏（足立1930・1931）による報告がまずあげられる。その後、件

の三島ヶ嶽経塚について三宅敏之氏により検討（三宅1961・1980）がなされた。また富士山の信仰世界を研究した堀内真氏により出土遺物も併せて検討（堀内1989）され、平成14年には富士吉田市歴史民俗博物館において企画展「富士山の信仰遺跡」が開催されたのも記憶に新しい（富士吉田市2002）。最近では富士山世界文化遺産登録の動きも相俟って、静岡県・山梨県で富士山の調査がなされているのは周知のことである。

当該文は平成20年度に静岡県が行った富士山世界文化遺産推進事業に伴う調査を当財団が受託した際、調査協力頂いた富士宮市教育委員会が富士山本宮浅間大社で保存されていたのを確認した、三島ヶ嶽経塚にかかる記録写真の検討である。本来ならば出土遺物そのものを検討せねばならぬものであるが、出土遺物の所在は未確認で、本文は写真で理解される点を中心に検討したものである。よって今後、遺物・写真の再確認によりこれらの所見も大きく変化するものであることをあらかじめ述べておく。

2 経塚の立地

三島ヶ嶽経塚は富士山の山頂に位置する（第1図）。山頂には火口が形成されているが、その火口は第1～3火口縁と第1・2火口棚で構成される（津谷1971）。火口外縁



第1図 三島ヶ嶽経塚の位置 (1/25000)

である第1火口縁は海拔3776mを測る剣ヶ峰を含む八葉であり、その八葉のうちのひとつに三島ヶ嶽（三島岳・三島ヶ岳）がある。三島ヶ嶽は富士山最高所剣ヶ峰から南東へ約280mの位置にあり、標高3734mを測る。当該経塚は三島ヶ嶽の北東裾部に位置するが、雪解け水がたまるこのしろが池（鰐池）に面し、経塚付近の標高は3713mを測る。このしろが池が位置する平坦面は第1火口棚に該当し、富士宮口登山道の終点である奥宮に近接する。この奥宮から駒ヶ岳にかけては火口から溢れた富士山頂最上層溶岩流を基盤とし、三島ヶ嶽はそれより以前の新富士火山中期溶岩に由来する紫蘇輝石玄武岩で構成される。しかし三島ヶ岳東側や剣ヶ峰崖下等、部分的に溶岩の薄層を挟む火山砂礫層を基盤となす箇所が見受けられ、経塚はこの火山砂礫層が主体となす一帯に設けられたものである。砂礫が広がる三島ヶ嶽周辺においては、経塚造営にあたって玄武岩の硬い岩盤を掘り貫く必要が少ないと想定され、塚構築に容易な面があったかもしれない。

3 経塚の造営

三島ヶ嶽経塚は末代が中心になって造営されたとされるが、末代以前にも富士山への登頂者は存在し、宗教的な足跡を遺した可能性（西岡2004・註）は充分に考えられる。末代による経塚造営への動態は1150～1159年頃に成立した史書『本朝世紀』に明らかで、『本朝文集』所収の鳥羽法皇の發願文ともあわせて三宅敏之氏によりまとめられている（三宅1961）。久安4年（1149）5月16日時点で、鳥羽法皇の命により大般若経の書写に多くの貴人・僧侶が参加、これを富士上人末代の活動に由来するものとする。末代は富士山に数百回登攀し、山頂に大日寺を建立し、関東

の人々に勧進し、比叡山の慈覚大師の作法に倣い一切経書写を進めていたとする。その活動の中で料紙600巻分が残り、上人は上洛。鳥羽法皇と結縁し、法皇は『大般若経』の写経を命じている。また末代が白山開基の日泰上人の転生と信じられている旨を記述している。5月2日に鳥羽法皇が仏頂堂にて富士上人がとりそろえた料紙に『般若心経』と『尊勝陀羅尼』を写経する。また『大般若経書寫人名帳』も院宣により作成された。5月13日に書写がされた『大般若経』が十種供養等を経て、駿河国富士山へ埋納のため富士上人末代に渡されている。末代の埋納経典の大半は、結縁した東海道・東山道の人々の力により整えられた大乗・小乗經典（『大般若経』600巻、鳥羽法皇宸筆の『般若心経』と『尊勝陀羅尼』を除く）、論、律の三藏やそれ以外の典籍を含めて4696巻である。

4 昭和5～6年時の報告と確認された写真

経塚発見の契機となったのは、火山砂礫を利用するため、昭和5年の奥宮参籠所建設の際、砂礫採取を行った人夫により発見されたものである。写真1・3～11は当該経塚が発見後、佐野氏・足立氏の報文に掲載された写真で、浅間大社が所蔵している写真である。ただし足立氏の報告に掲載されていた写真のうち、数枚は未確認である。

(1) 写真1

三島ヶ嶽を北東の方向から撮影したものである。三島ヶ嶽裾部に上方から転落したらしい大石が2個あり、件の石仏群も大石脇にある。経塚遺物は写真1にある×印の位置から出土したとされ、遺物は数箇所から出土したことが理解される。この写真は佐野氏の文に見られるものであるが、足立氏による県報告の写真と×印の位置が微妙に異なる。佐野氏の報文に基づいて埋經施設を概観すると、①「四五寸厚さの灰、炭などの層の下になつて木樽があらはれた」②「二寸厚さ位の板五尺四方位の箱様の腐朽せる中に經卷の軸と覺しきものゝ腐朽したるもの數百本埋藏してあつた。此の木樽の外層に破片ながら土器が並列しており、同じ場所に、注口を有する銅器の水瓶様のものが伴出した。」③「經筒は此の大石の下に壓し潰されて發掘せられた」「經筒三箇、土器、刀子らしき鐵器及び其の鞘らしき木片を發見した。」とある。さらに①について佐野氏は「經塚となして後、何代かの間修験者の修場となつて居つたのではないか」と推定する。

写真1には×印が3箇所認められるが、①・②がどの位置であるかは判然としないが、③は経筒が「大石の下」で発見された点から右端の×印の位置の可能性がある。この富士山頂一帯は噴出せられた溶岩・火山灰等に由来する堆積物で構成されるため、下界の経塚のように所謂「土」を掘り抜き、最終的に「土」で多い被せ、「土」で構成される塚状の施設は存在できない。山頂の激烈な風雨や氷雪に耐え得る埋経施設を想起せられるならば、埋経施設が大量の礫で構築されていたものと推定される。なお足立氏は「三島嶽南鰐池邊に於て經塚を發見」と報告し、氏報告の位置図（足立1931）も三島ヶ嶽の南側に経塚の位置が記されている。しかし昭和5年の三島ヶ嶽経塚発見時の写真（写真1）と近年の経塚出土地点周辺の地形（写真2）を比較して理解できるように、富士山火口南側、三島ヶ嶽東側に経塚が位置しているのが理解できよう。

(2) 写真3～4

佐野氏によれば、経塚から経筒・經典・經軸・土器・水瓶・刀子等が出土したとされる。経筒は銅製で3点出土とする。そのうち2点は破片資料であるが、もう1点は写真3及び写真4のように経筒底部だけは完存し、報告で佐野氏は①「朱書の經卷がギッシリ充填してあり、地層の變動によって此の二つの大石塊のために經筒は壓し折られ、經卷は其の儘石の下に壓迫された形で發見せられた。」②「經筒には外筒はなくしが如し、直接砂礫の中に埋没せられたため轉石のために破碎せられたるものならん」とある。経筒は底部と胴部下端部以外は粉碎された状態で、佐野氏は経筒は「直徑九寸七分弱」と報告する。発見時に現地にいた神官の証言から佐野氏は経筒内には八寸程度の經卷を2段積みして納入していたものと勘案し、「經筒の高さは一尺七八寸」（約51.5～54.5cm）を有していたものと推定している。また破片の状況から「圓筒は接合せる痕跡なきより思ふに鑄銅製のものなるべきか」「蓋と筒との接合する部分には特に被蓋式の銅帶を装して蓋と筒とは鉛留めになしたるが如し」としている。

一方、足立氏は「底板の徑は二八・二糀、厚は一・五糀、胴部は「厚一糀」と報告している。佐野氏の報告も勘案すれば、経筒の径は概ね28cm台なのである。さらに足立氏は経筒内面には「經卷の渦文壓痕」外面に墨書で「外周に幾つもかさね書きした間から承久の文字痕あるを發見」したとする。

写真4には経筒の残骸が見られるが、筒部と思われる部分が鉛留されているようにも観察される。しかし現物が所在不明のため断定しえない。経筒底について佐野氏によれば「筒の内側に輪走の堤状隆起ありて入れ蓋、入れ底の形式」としている。なお足立氏の報文には「承久」という墨書が確認された経筒底部外面の写真が掲載されている。残念ながら氏の写真では「承久」の文字は確認できない。この写真については、平成20年度の調査で未確認である。足立氏は「承久」を年号と考えている。

さて三島ヶ嶽経塚から出土したこの経筒は東日本で出土した銅製経筒でも最も大きい経筒となる（村木2003）。多くの銅製経筒は9～12cmが多く、大型でも15cm台である。三島ヶ嶽経塚出土銅製経筒に匹敵するのは氏の指摘通り神奈川県鎌倉市の永福寺経塚出土経筒（径24cm）であろうか。この三島ヶ嶽経塚出土の経筒は大量の經卷を収納することを意図したものであるのは明らかである。また通常、経筒は外容器内に収納されていることが多いが、佐野氏の報告のように当該経筒は外容器に納められていた痕跡が認められない。

(3) 写真5～6

写真5は經軸と水瓶である。撮影時は經軸を背後の壁に立て掛け、床上に水瓶破片が置かれている。水瓶を詳細に観察すると、3つの破片が認められる。左側は水瓶の肩部と考えられる。肩部には突帯が巡らされている。頸部は下位まで残存し、頸部中位から口縁部にかけては失われている。その隣は注口部と考えられる。胴部上位付近に取り付けられたものであろう。この注口部は湾曲し、法隆寺伝世資料に代表される「仙蓋形水瓶」に見られる添水口のような形状ではない。菊花座を設えた鳥首形のようなものか。右端の破片は胴部下位と考えられる。台脚は直線的に立ち上がり、底部外縁に接続する。底部板は写真には写っておらず、亡失したようである。嵌底であったのである。水瓶の口縁部が欠損しているため、尖台の有無等が判然としないが、全体的の残存状態とその形状から勘案して「布薩形水瓶」の可能性があろう。

経塚遺跡において仏具としての水瓶を副納した例は極めて少なく、経塚において水瓶は副納する必要性が限定された特殊なものと考えられる。水瓶出土経塚として京都府鞍馬寺経塚（奈良国立博物館1977）が知られ、仙蓋形水瓶が出土している。また和歌山県那智経塚付近で布薩形水瓶

第1表 浅間大社所蔵佐野氏・足立氏報告写真

写真No.	掲載文献・掲載時写真タイトル
写真7	足立鉄太郎1930「富士山頂三島嶽南經塚遺物中の經筒と經巻につきて」『考古學雑誌』第二十卷第十二號 第三圖 富士經塚發見紙本墨書大集經四十三
写真9	足立鉄太郎1930「富士山頂三島嶽南經塚遺物中の經筒と經巻につきて」『考古學雑誌』第二十卷第十二號 第四圖 富士經塚發見紙本紅殻書南海寄歸内法傳
写真11	佐野武勇1930「富士山頂三島ヶ嶽の經塚」『考古學雑誌』第二十卷第十號 第六圖 朱書經巻の一部

が出土しているが、經塚の副納品や否や不明（東京国立博物館1985）である。よって管見に入る範囲内で布薩形水瓶を副納した經塚は三島ヶ嶽經塚のみである。

写真5・6に写る經軸の材質は「多く杉か櫻の細き木片」とし、佐野氏は報告で經軸を「軸木」とし、「A、両端に黒漆塗りとなしたるもの。直徑五分。長さ折損して不明。」、「B、白木にして塗料を施さざるもの。直徑二分五厘。長さ八寸八分。」、「C、丸き杉箸様の軸を二ッ割となしたもの、直徑一分八厘位長さ八寸。中に杉箸様のものの代わりに竹箸様のもの即竹を二ッ割となしたるもの交り。」と3タイプに分類している。即ち直徑約15mmのAタイプ、Bタイプは直徑約7.5mmで長さ約26.6cm、Cタイプは直徑約5.4mm、長さ約24.2cmを測ることになる。写真5では右側7本がAタイプに該当し、残りがBタイプと考えられる。ほぼ中央部に大きく湾曲した經軸が認められるが、何故湾曲するに至ったのか、本当に經軸なのか判然としない。Aタイプ及びBタイプは木櫛内からの発見とし、佐野氏は經軸を残して經典は消失し、わずかに残片が残っていたとする。写真6で經典が巻かれていたのは全てC類で、經筒からの出土品である。佐野氏は「此の紙を此の軸に巻くに單に二ッ割の軸を合わせて一本の軸の如くにして巻き決して この二ッ割りの割れ目に紙の端を夾んで巻き初める様な事はしていない」とある。また「經文の書き初めが中に巻き込まれて書き終りが表面に來手居る様である。」と観察している。足立氏に經軸については所見を述べられていない。

写真6は經筒内から出土したとされる經骸を2つの箱に積み上げて撮影されたものである。經骸の表面には砂が一面に付着する。佐野氏によれば經筒内に「朱書の經巻がギッシリ充填」してあったと云い、足立氏によれば件の「承久」と書かれた經筒内から經骸50巻を確認したとする。そのうち3巻が紙本墨書經で、残りは紙本朱書經であったという。

第2表 富士山出土經典

出土地	經典名	備考
三島ヶ嶽經塚	『大方等大集經』 日藏分送使品第九 日藏分念佛三昧品第十 『佛本行集經』 淨飯王夢品十七 道見病人品十八 道逢屍品十九 耶輸陀羅夢品二十上 『南海寄歸内法傳』 卷第一 『大唐大慈恩寺三藏法師傳』 卷第二 『廣弘明集』? 辯惑篇第二之四 辯惑篇第二之五	經筒内より出土と報告。 現在所在不明。
山頂出土?	『無量義經』 徳行品第一 說法品第二 『妙法蓮華經』 藥草喻品第五 授記品第六 化城喻品第七 五百弟子授記品第八 授學無學人記品第九 法師品第十 觀世音菩薩普門品第二十五	富士山本宮浅間大社所蔵。 三島ヶ嶽經塚出土品?
経ヶ岳經塚	『觀普賢菩薩行法經』	富士吉田口五合五勺。 大正13年(1924)出土。 經骸10巻のうちの1巻

(4) 写真7～9・11～12

經塚發見以降、50点の經骸について分析が進められ、昭和5・6年に足立氏は經典名を公表している。昭和5年に發見されたとする經骸の所在は現時点では未確認であるが、浅間大社では紙本朱書經を10巻分所蔵しており、そのうち5巻が開かれている（富士吉田市2002）。その内容は『無量義經』（徳行品第一・說法品第二）、『妙法蓮華經』（藥草喻品第五・授記品第六・化城喻品第七・五百弟子授記品第八・授學無學人記品第九・法師品第十・觀世音菩薩普門品第二十五）と判明している。この10巻分が三島ヶ岳經塚からの出土品であるかどうかは詳らかではないが、山頂出土の經典として理解されている。また佐野氏や足立氏が昭和5～6年時点で確認した經典は『大方等大集經』（日藏分送使品第九・日藏分念佛三昧品第十）、『南海寄歸内法傳』（卷第一）、『佛本行集經』（卷十五のうち、淨飯王夢品十七・道見病人品十八・道逢屍品十九・耶輸陀羅夢品二十上）である。

今回浅間大社において所蔵を確認した佐野氏・足立氏報告分三島ヶ嶽經塚出土經典の写真は第1表に示す。写真7～9・11～12は經典の写真で、写真12については足立氏の昭和6年の報文から参考資料として転載したものである。

写真7は『大方等大集經』である。日藏分送使品第九から日藏分念佛三昧品第十にかけての部分で写真の中央部に

は「□□□大集經日□□□佛三昧品第十」とあるのを見ることがある。足立氏により報告された写真である。3巻分出土した墨書経のうちのひとつである。

写真8については、佐野氏・足立氏ともに未報告の写真である。解読の結果、写真7と同じ『大方等大集經』日像分送使品第九であることが今回判明した。現在経典の所在は不明となっているが、写真から出土経典は撮影時には表丁・修復されていたものと判断される。写真7同様墨書経と考えられる。

写真9は義淨撰の『南海寄歸内法傳』卷一である。冒頭に「□□□□□傳卷第一 三藏沙門義淨撰」とあるのを見ることができる。写真7同様、足立氏により報告された写真で、朱書経である。

写真11は佐野氏の報告で「朱書経典」として紹介され、遺存状態が悪かった為か足立氏も解読できず触れられることが無かったと思われる経典である。今回解読を行った結果、唐の慧立が編集した『大慈恩寺三藏法師傳』卷第二の残片と推定される。写真には2つの経骸が写っている。右側の経骸で確認される「…寒冷春」と左側の経骸「…所須事公給彼僧稱法師者…」との間には1行約17字として約58行分の文字が存在しているものと考えられる。また釈文と『大正新脩大藏經』所収『大慈恩寺三藏法師傳』抜粋と比較して、左側の経骸は誤写している可能性があるが、今後他の古写経との比較作業が必要である。

写真12は足立氏による昭和6年（1931）報告を転載したものである。昭和5年（1930）報告文には「第七圖富士經塚發見道經と認めらるゝ二巻の一部」、昭和6年報告文では「圖版十九 紙本血書道藏二種」と紹介された経典である。平成20年度の調査では浅間大社所蔵品の中に該当する写真は確認できなかった。この掲載された写真を観察すると足立氏の指摘通り、列子『天瑞』第一の引用部や、「服丹金色二十八」と道教関係の用語も散見される。一般的に「一切經」の中には仏教と道教の比較を行い、優劣を説く書物の存在がある。検討の結果、唐の道宣が著した『廣弘明集』辯惑篇第二之四や第二之五に酷似する。ただし足立氏の写真が不鮮明であるため、これ以上の推定に躊躇する。

足立氏の昭和5・6年の報告にはそれぞれ「経卷奥書」の写真を掲載している。しかし「十七日書了 末代聖人□亮（覺亮か？）」と解読された紙片が摘出されたのが、

いずれの経骸かは不明と報告されている。これまで触れてきた富士山内出土の経典は第2表のように整頓できる。

ここで出土経典の性格について整理しておく。足立氏は「…末代上人と尊稱するのは必ず其流を所業であつて、承久は久安より七十年後の事故時に於て相應すると考へられる…」とし、出土経典の写真を黒板文學博士（黒板勝美氏か。）に送付し、鑑定の結果、「立派なる鎌倉前期の筆迹」という回答から、出土経典は承久年間のものと推定されている。

しかし三宅敏之氏は出土遺物や出土経典について小山富士夫氏や堀江知彦氏から助言を得た上で、Ⓐ「これらの遺物を久安年間とするのにさして不都合は感じられない」としている（三宅1961・1983）。また三宅氏はⒷ「…経筒の底部に「幾つもかさね書きした」ということは、従来発見の経筒にはあり得ない」とし、またⒸ「その承久という文字が果して年号をあらわしたものであるという確証もない…」としている。また「末代聖人」と記載された経典断片についてはⒹ「…勧進者その人を記したものと考えるほうが当時の書き方としては妥当」と考えられた。他にⒺ「報文に全く記されていない血書の無量義經と法華經が富士山頂出土品として現在浅間神社に保管されているのも不思議なこと」と述べている。三宅氏はⒶ～Ⓔの点から①「木樽に収めて埋納されたものは末代勧進による一切經」②「その後この地が一種の靈地として埋納供養の中心となり、例えば紀州那智山や、大和金峯山のように追納されたのが経筒であり、現在浅間神社に見られる経典類はこの追納分」③「報告書に一切經の一部として経筒内発見と記された経典類は、実は木樽内から発見されたものを混同、誤認」と推定されている。

現時点において埋納経典が判明した経塚は少ない。奈良県金峯山経塚では寛弘4年（1007）の藤原道長による埋経では『妙法蓮華經』・『無量義經』・『觀普賢菩薩行法經』・『阿弥陀經』・『觀弥勒菩薩上生兜卒天經』・『弥勒下生經』・『弥勒菩薩下生成仏經』・『般若心經』が埋納された。三重県朝熊山経塚では『妙法蓮華經』・『般若心經』・『一切如來心中真言』・『隨求陀羅尼』・『仏頂尊勝陀羅尼』の埋納が知られている。興味深い例では高野山奥之院経塚の比丘尼法薬の埋経では『妙法蓮華經』・『無量義經』・『觀普賢菩薩行法經』・『般若心經』・『阿弥陀經』等の経典の他に『比丘尼法薬願文』・『比丘尼法薬供養作善目録』、そして『金剛界

種子曼荼羅』・『胎藏界種子曼荼羅』・『法華種子曼荼羅』が埋納された。現在の一般的な見解として埋納經典で主体を占めるのは『法華經』である。静岡県内では勝栗山経塚（浜松市北区：旧浜北市）で出土したとされる外容器（陶製五輪塔）には「妙法蓮華經」、白山神社経塚（島田市：旧金谷町）では經筒と共に鏡に「法華如寶經」と書かれた2例が知られ、他に埋納經典名が明らかな例は三島ヶ嶽経塚のみである。

ここで三島ヶ嶽経塚の出土經典を再考する。写真9の『南海寄歸内法傳』は唐代に入竺求法僧の義淨がインドの仏教事情を記録した書籍であり、写真11の『大慈恩寺三藏法師傳』は義淨よりも約30年前にインドに赴いた玄奘の伝記である。これら『南海寄歸内法傳』・『大慈恩寺三藏法師傳』に加えて仏教・道教の優劣を説く『廣弘明集』？は所謂「經」・「論」・「律」に属さず、これら三藏に中国の高僧の書籍等を付け加えて成立した大藏經（一切經）の内容に相応しい典籍である。従ってこれらは通常の經塚に埋經するために用意された經典ではなく、三宅氏の指摘通り末代勸進の一切經の一部と考えた方が合理的である。さらに足立氏の報文通り經典が「承久」經筒から出土したとするならば「承久」年間ににおける仏頂尾流を代表とする埋經各派の所作等の差が經典に現れたと考えるより、私見ではあるが⑦「末代の埋經後、数十年後の「承久」年間に残存していた末代の埋經を整理・再埋納した」⑧「末代勸進の一切經の内、木櫛に収めきれなかった經典が經筒という形で埋納、墨書は後代の追記」とも2つの推論が考えられる。「承久」經筒が外容器の無いまま埋納された理由も⑨に係る可能性があろう。さらに三島ヶ嶽経塚の「承久」と書かれた經筒に収納されていたとされる『大方等大集經』・『佛本行集經』・『南海寄歸内法傳』・『大慈恩寺三藏法師傳』・『廣弘明集』？また可能性として『妙法蓮華經』・『無量義經』等大量の經典をすべて揃えて、この經筒に収納することが可能であったのだろうか。墨書經3巻の中で確認された『大方等大集經』も本来は大部の經典であり、墨書經が3巻分のみの発見ならば『大方等大集經』は不完全な形で經筒に納められていた蓋然性が高い。なお第2表にあるように富士吉田口登山道五合五勾の經ヶ岳でも埋經が確認され、周知の通り富士山内各所に埋經された可能性を追認する。

(5) 写真10

写真10は出土した土器である。写真には左に完形に近い壺、写真中央部に破片2点ほど見られ、右側にはある程度形が残存した土器が撮影されている。左側の壺は底部から僅かに内湾するものの、ほぼ直線的に体部を立ち上げている。胴部中位に一条、下位に一条、横位の沈線が描かれている。肩部と体部との境界は明瞭で、この付近の前後から窯体内での焼成時の降灰に由来する釉が見られる。頸部はやや外反気味に立ち上げている。口縁部は大きく外折させ、口唇部は上方に折り曲げている。佐野氏は報告の中で「…土質は須恵器に近似せる灰白色に暗緑色を混じへた様な然し須恵器程緻密でない。第七圖左方の壺は、高さ八寸、肩の直徑六寸、口径三寸五分、底徑三寸であつてその中に何物も容れてなかつた。」すなわち器高約26.6cm、体部最大幅約20cm、口径約11.7cm、底径約10cmを測る資料である。用途として外容器と使用されたのであろうか。この左側の壺は古瀬戸壺にも形態的に類似するが、口唇部の形状の断面の形状がN字状である。また古瀬戸四耳壺が胴部と高台との境界が明瞭なのに比べ、写真的土器は不明瞭であり、該期の古瀬戸四耳壺とは異なる。そのため渥美産の壺の可能性も指摘されているが、写真での観察には限界がある。右端の土器は頸部より上位を欠損し、体部上位附近のみの資料である。佐野氏は昭和5年に土器片の拓本を報告、その拓本に関して赤星直忠氏はその土器片は鎌倉時代の所産と推定（赤星1931）している。写真的土器資料についても現在、所在が不明のため、これ以上の推論に躊躇する。なお東京国立博物館には12世紀代の渥美産と考えられる壺口縁部と鉢の破片資料、常滑産陶器と思しき破片資料が保管（東京国立博物館1988）され、転用された外容器と推定されている。東博の資料写真では山茶碗の細片も見られることから、前述の鉢の破片も併せて外容器の蓋に転用されたものであろう。件の「承久」の經筒は既に述べたように外容器が伴わない状態で出土しているが、径が約30cmを測る經筒を納める外容器として専用の外容器もしくは常滑産の甕等が想起され、外容器を伴わない状態で発見される大型經筒の存在について一考を要する。

5まとめ

前章まで古写真を中心に私見を加えて述べてみた。写真のみを扱うのは本来的に問題もあるが、今後の当該經塚



写真1 三島ヶ嶽経塚発見時（昭和5年）

富士山本宮浅間大社所蔵写真



写真2 近年の三島ヶ嶽経塚跡付近（平成20年）



写真3 経筒出土状況
富士山本宮浅間大社所蔵写真



写真4 出土経筒

富士山本宮浅間大社所蔵写真



写真5 出土経軸・水瓶

富士山本宮浅間大社所蔵写真



写真6 出土経骸

富士山本宮浅間大社所蔵写真



写真7 出土經典（大方等大集經日藏分送使品第九～日藏分念佛三昧品第十）

富士山本宮浅間大社所藏写真



写真8 出土經典（大方等大集經日藏分送使品第九）

富士山本宮浅間大社所藏写真

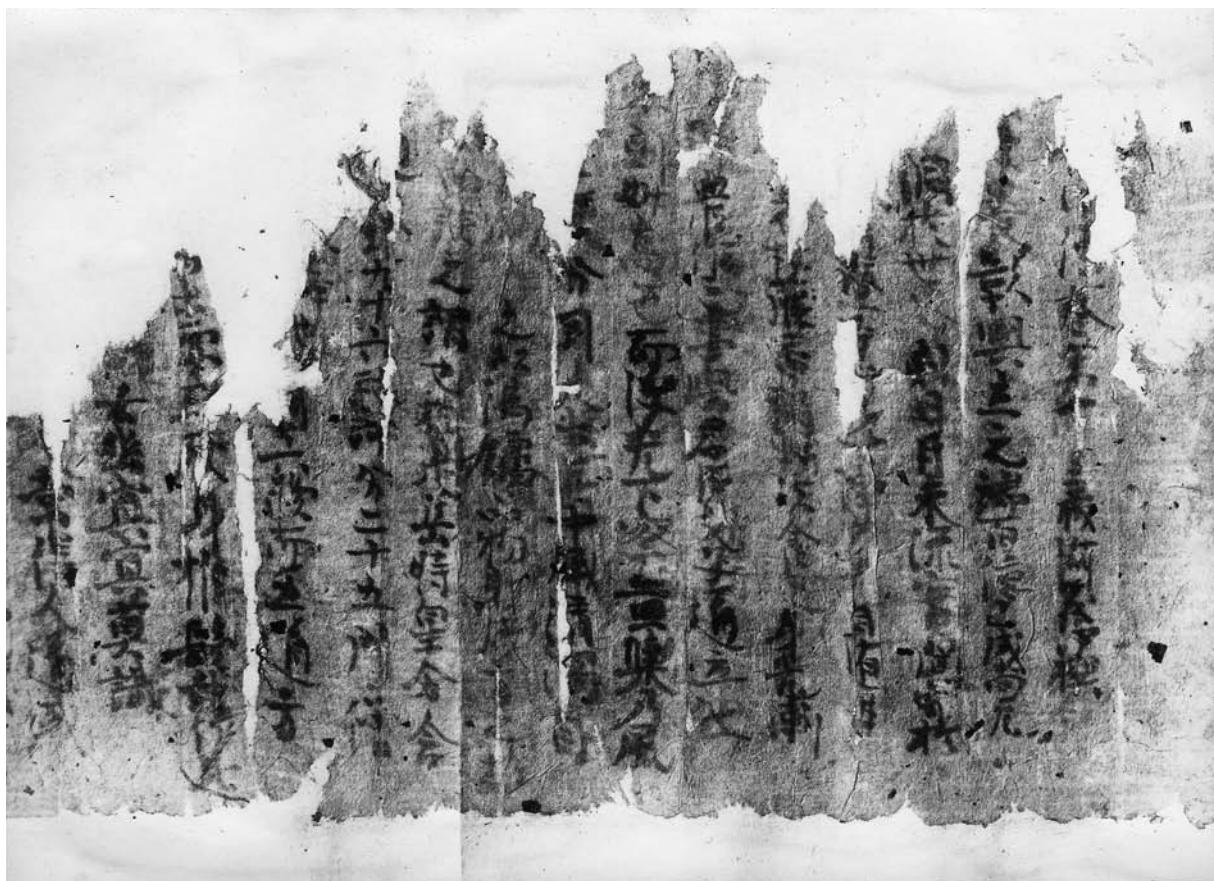


写真9 出土經典（南海寄歸內法傳第一）

富士山本宮浅間大社所蔵写真



写真10 出土土器

富士山本宮浅間大社所蔵写真

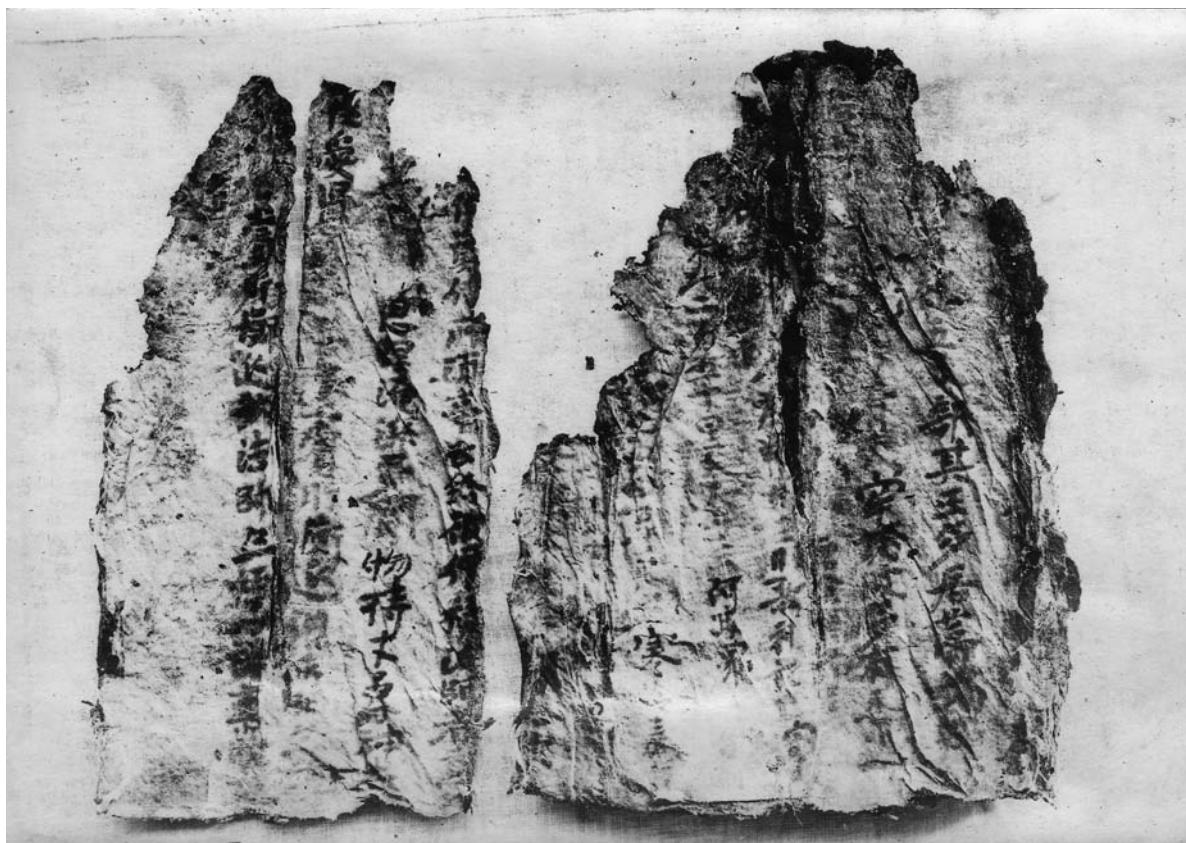


写真11 出土經典（大慈恩寺三藏法師傳）

富士山本宮浅間大社所蔵写真

圖版十九

紙本血書道藏二種と（左上）經奧書



写真12 出土經典（廣弘明集？）：足立1931より

Mishimagadake Sutra Mound

—Examination of Photographs Owned by Fujisan Hongu Sengen Taisha—

Naoto KATSUMATA

Summary: The Mishimagadake sutra mound was found on the summit of Mt.Fuji in 1930 including sutra scrolls in containers, axles of sutra scroll, ritual water vessels and potteries, as well as wooden burial chambers. Judging from its scale and written documents, it can be established in 1149 by Matsudai and his followers.

Accompanying the promotional project for an entry of Mt.Fuji into the World Cultural Heritage, I examine the photographs of the Mishimagadake sutra mound conserved by Fujisan hongu Sengen taisha, which were mostly used for the reportage made by the board of education of Fuji city in 1930-1931. Investigating photos of sutras whose names unknown; I estimate them to be parts of “the Daijionji sanzohoshi den” and “the Daihododajitsu Sutra”. This estimation and the existence of “the Buppongoyosu Sutra” and “the Nankaikikinai hodden” reinforce the possibility of that the said sutras can be “the Isai Sutra” which Matsudai dedicated.

The Mishimagadake sutra mound is required to be reassessed by identifying excavated objects and photographs.

Key words: Mishimagadake sutra mound, Mt.Fuji, Pitcher, Rollers of sutra scrolls, wooden burial chamber, sutra mound, Matsudai, the Issai Sutra, Fujisan hongu sengen taisha, the Daijionji sanzohoshi den, the Daihododajitsu Sutra, the Buppongoyosu Sutra, the Nankaikikinai hodden